関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

「家の神」誕生の一形態 ―静岡県井川の荒神祭祀を事例に―

著者	森 隆男
雑誌名	昔風と當世風
巻	91
ページ	9-14
発行年	2007-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/2664

「家の神」誕生の一形態

―静岡県井川の荒神祭祀を事例に―

森　隆男

はじめに

住まいの屋内に常在する神霊は多様で、それらの歴史もさまざまである。火の神や水の神のように生活に密着した神霊は古くから人と同居し、土間付近にわずかに残存している。また鴨居に神棚を取り付けて、伊勢神宮などの有名神社や氏神から神札を請けて祀っている。祖先の霊も仏壇という常在の場を得て祀られている。これらの神霊がすみ分けをした場に、歴史の反映をみようとしたのが今和次郎であった。飯島吉晴は屋内神を公的な神と私的な神に分け、前者が男性の手によって表側に、後者が女性の手によって裏側に祀られると指摘した。

私は、これらの神霊を複合した性格をもつ「家の神」の存在に注目している。今回、私が静岡県葵区井川で知った荒神は本来屋外で祀られた神霊と思われるが、祭祀の場を屋内に移して、当主の男性によって「家の神」として祀っている。これは前出の屋内神とは祭祀のあり方が異なる、興味深い事例である。

本稿では祭祀の場に留意しながら、家の神としての機能をもつに至った背景を考えてみたい。なお、この地区の生活については、井川雑穀文化調査委員会が発行した『井川雑穀文化調査報告書』に詳細な報告が行われている。本稿はこの報告書の成果によるところが多い。

一　井川地区の概要と「居小屋」

井川は平成一五年の合併で静岡市になったが、大井川の上流域に位置する、海抜約七〇〇mの山村である。昭和三二年に完成した井川ダムにより、金山と森林からの収入に依存する一方、焼畑栽培を生業としていた生活が一変した。ちなみに地区の農家は一九五〇年当時四二二戸あり、そのうち一〇一戸が焼畑に従事していた。明治四四年当時は戸数四〇五戸、人口二千一九〇人であり、半世紀の間に大きな変化はない。

さて焼畑栽培のため、山中に「居小屋」と呼ばれる出作り小屋が作られた。現存する居小屋は明治から大正にかけて建築されたといわれている。大工の手による造作もみられ、井桁造りや押板など飛騨や能登地方にみられる民家と共通する要素が認められるという。野本寛一氏によると、春に山に入ると本宅に戻るのは盆と諏訪神社の祭り、旱天の際に雨乞いをする時だけで、秋に山を下るまでほとんどこの小屋で過ごしたことになる。すなわち小屋というより、小規模ではあるが民家で

写真１　ダム湖畔に広がる井川本村

あった。これは居小屋に荒神や祖先の霊など常設の神祀りの場が設けられることからもいえよう。

居小屋は、本村にある本宅の構成要素のうち不必要な部分を切り捨てて小型化したものといわれる。その点からみると、住まいにおける神祀りのあり方が単純化して示されているといえよう。しかし、居小屋は現存するものの、そこでの生活はすでに過去のことであり、祭祀を具体的にみることはできない。一方、本村の住まいには今なお荒神が祀られている。そこで本稿では、居小屋と本村の住まいにおける荒神祭祀を重ねながら具体的に検討したい。

二　居小屋における荒神祭祀の空間的把握

焼畑の拠点であった菅山に残っていた五棟の居小屋のなかで、もっとも原形をとどめているとされるのが栗下隆伊氏の居小屋である。報告書には推定復原図が収録されている（図1）。居室の奥に一畳程度の小部屋が設けられており、当時押入れとして使用されていたが、この部分のみ天井が張られていたことから、報告書では帳台の機能をもつ部屋と推測している。そして天井板の汚れが居室部分に比べて少ないと指摘されている点から、普段は閉鎖された空間であったといえる。

また、井川地区田代の集落内に居小屋と同様の構造をもつ建物が残されている。旧滝浪敬一郎家で、現在は付属建築物の形態をとっているが、「一間造り」を知る上で貴重な建物として静岡市の指定文化財になっている。切り妻平入りの建築物で、居室部の奥に二畳大と三畳大の小部屋があり、天井が張られている。居室の一部には畳を敷いた痕が認められるという。写真2はその外観、図2は平面図である。想定復原の結果も同様で、居室の中央部にいろりが切られていた。

当地域で長年神職を務めている滝浪文人氏（大正六年生まれ）によると、一般的な居小屋の平面は図3のように、一〇～一二畳の主室、二畳程度のナンド、二畳程度の倉で構成され、ウスヤと呼ばれる下屋と、日常の出入り口となる下屋が付設される。主室は食事や団欒、睡眠など日常生活の場で、中央にはいろりを切っている。また倉に食い込む形で押板が設置されている。押板にはかつて神社や寺院で授与された神札を貼っていた。ナンドは寝室というより、その奥に神棚と仏壇が設置されることから祭祀の場とみるべきである。倉は稗や粟など食料を収納する場で、民家の稗倉に相当する。ウスヤには唐臼が設置されてい

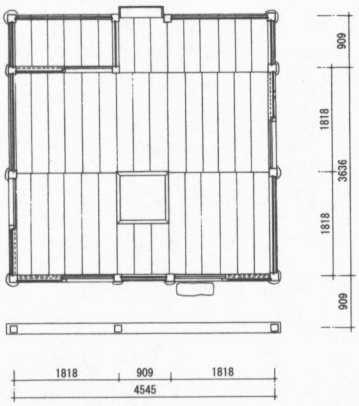

図1　栗下隆伊氏の居小屋推定復原平面図
（『井川雑穀文化調査報告書』）

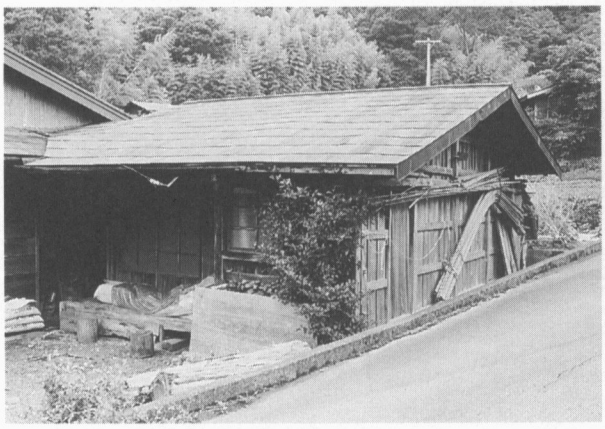

写真2　旧滝浪敬一郎家外観

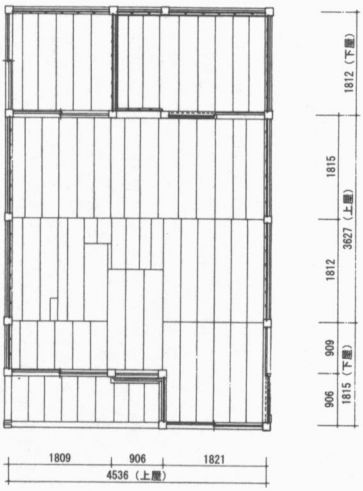

図2　旧滝浪敬一郎家平面図
（『井川雑穀文化調査報告書』）

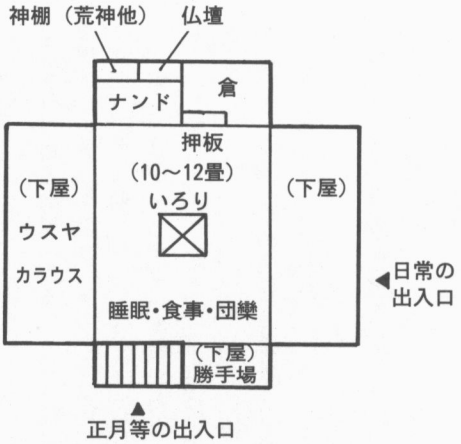

図3　居小屋の平面概念図（滝浪文人氏ご教示）

る。そのほか狼除けとされる勝手場と、正月など特別の日に出入りする玄関が設けられる。

現存する居小屋に滝浪氏の情報を当てはめると、居室部の奥に一畳ないしは二畳程度の閉鎖的な小部屋が設けられ、祖先や荒神を祀る専用の部屋として使用されていたことがわかる。栗下氏の居小屋などで天井板が張られていたのも神祭りの部屋であるからだろう。なお菅山の滝浪作代家には二室の小部屋がある。いずれも棹縁天井が張られており、この家を調査した野本氏はそれぞれ稗倉と粟倉であったと報告している。しかしこの家の推定復元図によると、当初二室の建具と間仕切りはなく、この居小屋については荒神祭祀の状況を明らかにすることはできないが、報告者は天井の存在から神棚の可能性に言及している。

また栗下氏の居小屋の小部屋には、カミデイの呼称があったという。本村の住まいには

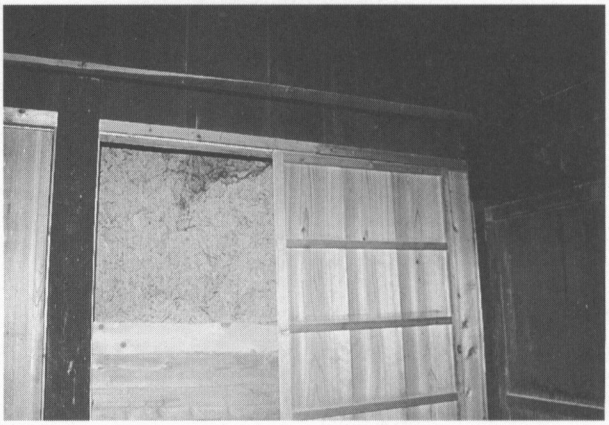

写真3　稗倉

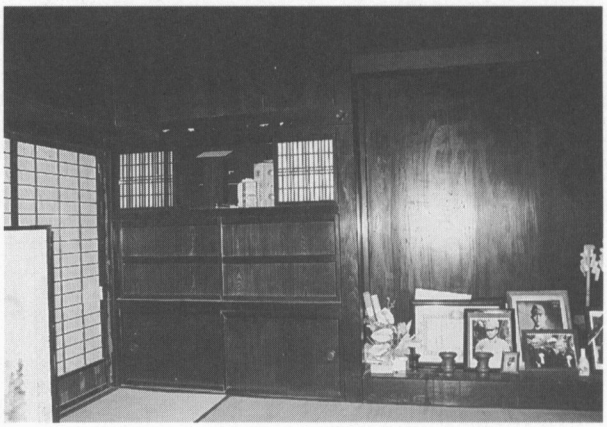

写真4　カミデイの奥に設けられた神棚

カミディとよばれる、女性の立ち入りがタブー視されている部屋がある。やはり住まいの最奥部に位置しており、床の間をはさんで左に荒神を祀る神棚、右に仏壇が設けられている。居小屋と本村の住まいを重ねたとき、空間上同じ位置に荒神のための祭祀設備を認めることができる。祖先の霊と同じ位置で、しかし明確に区別して祀られる荒神とはどのような神霊なのであろうか。

三　祭祀の場の移動と性格の変化

井川地区では毎年一二月の暮れに神職が各家を訪ねて、荒神祭りの儀礼を行なう。その際、一升枡に豆をいれ、新しく切った七本の御幣を立てる。それらを紙に包んで一本にして神棚に安置する。一升枡の豆は翌年の種にする。同地区小河内では、前年に作物が不作の場合、正月二三日に行なわれる氏神の春祭りの際に、一升枡に豆をいれて幣束を立て、神職に祈祷をしてもらった。これらの儀礼は荒神が農耕神としての性格をもっていることを示している。また滝浪久兵衛氏（大正一三年生まれ）は、荒神は生活を楽にしてくれる神という。また難産のときは荒神に供えた洗米を飲むと安産になるといい、産神としての性格もうかがえる。ここには家の神としての総括的な性格をみることができる。なお勝手場に祀る竈荒神は別の神として区別されている。

この地区では、荒神は当初、住まいの下屋の部分で祀るものだという。下屋は屋外と屋内の境界的な空間と意識されている。その際に幣束を藁に包むことから、スボッコ荒神と呼ばれる。生活が楽になると、屋内のナンドの奥に祠を設けて荒神を祭祀した。代替わりの際には、祠を取り替えた。荒神祭りのときに祭壇に藁の束を置くのはスボッコ荒神の名残りとされる。

この伝承は重要で、荒神の祭祀の場が屋外から屋内に移動したことを暗示している。菅山に居小屋を所有していた滝浪さかゑ氏（昭和七年生まれ）は、小屋の外に三宝荒神を祀っていたと明言しており、毎年八月七日には小屋を所有している人々が集まって、神楽をあげたという。また焼畑でも必ず三宝荒神を祀っていたという。農耕神であるとともに、火を扱う焼畑では火の神としての役割りを期待されていたからと思われる。

この地区では、荒神は三宝荒神と区別されている。しかし、住まいの奥に祀られた荒神の性格と、屋内外の空間及び焼畑に祀られた荒神を総合的に検証したとき、次のような解釈が成立する可能性があるのではなかろうか。すなわち当初、焼畑で祭祀されていた荒神が屋内に祭祀の場を得て祀られたとき、家の神としての性格を獲得したと考えたい。祭祀の場が一時的に下屋に設けられるのは、荒神の性格のためである。しばらくの間、屋内と屋外の緩衝空間である下屋において、荒神の激しい性格を鎮める時間をつくったのであろう。しかし祟りやすいとする性格は依然として残されている。そして焼畑で期待されていた火の神としての性格は、竈荒神に引き継がれている。

四　木曽地方の荒神祭祀

年の暮れに行われる荒神祭りなど荒神祭祀に深くかかわってきたのは、法印と呼ばれる宗教者である。荒神が屋外から屋内へ祭祀の場を移動させ、家の神へと変容する過程で重要な役割を果たしたのも彼らと考えて間違いなかろう。静岡県南部の漁村由比町では、荒神を藁で作った荒神船に三本の幣束を立てて祀る。前出のスボッコ荒神との共通点もうかがえる。この地域で荒神の祭祀を担当しているのも不動院の法印である。法印を含む宗教者と荒神祭祀については多々良典秀氏の研究を参照されたい。

さて、過日、調査で訪れた長野県の木曽地方の民家で荒神祭祀の実例を見聞することができた。木曽地方には、住まいの最奥部に

「荒神部屋」と称する部屋がみられる。私が訪れた上松町では寝室の奥に位置していたが、案内をしていただいた地元の研究者の丸山敬一氏によると、荒神部屋は主屋の鬼門に設けられているという。いずれも二畳程度の広さをもち、私が見学をした事例では入り口以外を閉鎖した暗い空間であった。また女性の立ち入りが厳しく禁じられている。ここで祀られる荒神は、家を守るとともに、養蚕が盛んな時代は蚕の神でもあった。火を焚くところに祀る竈荒神とは区別されている。小正月には他の神がみと同様にツクリモノなど多様な供物が供えられる。そして残された神札や伝承から、荒神部屋に祀られている荒神の祭祀に御岳教の行者が深くかかわっていたことを知ることができた。

佐々木勝氏の報告によると木曽地方の大桑村の荒神部屋は二階の隅に設けられているという。やはり女性の立ち入りがタブーになっている。直江廣治氏もかつて木曽地域の荒神部屋を調査し、荒神部屋がある家には屋敷神が祀られていない点に着目して、屋敷神が屋内に取り込まれたのではないかという興味深い指摘をしている。

ここでは荒神が屋内の最奥部に祀られ、女性の関与が否定されている点に留意したい。これらの点は井川地区の荒神祭祀と共通するからである。

五　屋内神としての荒神祭祀誕生の背景

静岡県や長野県に分布する荒神祭祀の事例は、住まいの裏側の空間において男性による家の神祭祀が行われるという点で、既存の研究成果とは異なる材料を提供してくれる。そして井川地区の居小屋は屋内神の成立と展開を空間的に把握する上で重要な資料といえる。

荒神祭祀に法印などの民間宗教者がかかわり、丸山氏が指摘したように鬼門を守護するために祀られたとすると、その歴史はあまり遡ることができないと思われる。その時期は、荒神の祠を家長の代替わりに新調するとされている点から、家父長制が成立する近世以降のことであろう。しかし、屋内において荒神がスムーズに「家の神」としての地位を獲得したとみるには疑問が残る。祭祀の場所が住まいの最奥部にある閉鎖された暗い空間であること、しかも寝室に接した位置にあることに着目すると別の解釈が成り立つのではなかろうか。先行研究によるとこのような空間では、中国地方の納戸神のように女性による祭祀が行われていたからである。すなわち荒神が家の神として屋内で祭祀される前段階に、女性による家の神の祭祀が存在した可能性を想定したい。荒神祭祀において女性の関与が強く否定されるのも、祭祀の場と成った空間で、女性から男性へと司祭者の急激な転換が行われたからと考えられる。そして荒神に産神としての機能が付与されているのは、女性による祭祀が行われていた名残りとみることができるのではないだろうか。

なお木曽地方の荒神部屋は、家の新築や改築に伴い急速に消滅しており、現存している事例は少ない。しかしかつては多くの村で見ることができた。祭祀の方法や司祭者など興味深い点が多く、別稿で詳細に検討するつもりである。

本稿の執筆に当たっては、井川地区の滝浪文人氏、滝浪さかゑ氏、滝浪九衛氏、長野県上松町の丸山敬一氏に大変お世話になった。心よりお礼を申し上げたい。

参考文献

・『井川雑穀文化調査報告書』井川雑穀文化調査委員会　二〇〇四
・多々良典秀「井川の荒神信仰」静岡民俗学会編『中日本民俗論』岩田書院　二〇〇六
・『静岡県史資料編』二四　民俗二　一九九三
・野本寛一『焼畑民俗文化論』雄山閣出版　一九八四
・佐々木勝『屋敷神の世界―民俗信仰と祖霊―』名著出版　一九八二

・直江廣治『屋敷神の研究』吉川弘文館　一九六六
・今和次郎「住居の変遷」『日本民俗学大系』第六巻　平凡社　一九五八
・飯島吉晴『竈神と厠神』人文書院　一九八六
・宮田登『女の霊力と家の神』人文書院　一九八三